



営農NEWS



イチゴ根やクラウン部などを加害するハエ目の幼虫（チバクロバネキノコバエ）が県内で初めて確認されました

病害虫発生予察特殊報第 2 号（県病害虫防除所 9 月 30 日発表）によりますと

本年 1 月に、県央地域のイチゴ（ハウス）圃場において、イチゴ葉の外縁が黄化・褐変し、外葉が枯死する株がみられ、被害株のクラウン部を加害しているハエ目幼虫を確認しました。調査の結果、県内イチゴでは未確認のチバクロバネキノコバエ（別和名 チビクロバネキノコバエ）の幼虫と判明しました。

チバクロバネキノコバエ幼虫によるイチゴでの被害は、平成 10 年に三重県で初めて確認され、16 年に長野県、22 年に長崎県、24 年に佐賀県で確認されています。

なお、本種による被害は主にキュウリやメロン、花き類で多く発生します。

<被害状況>

イチゴの根やクラウン部などを、幼虫が食害します。このため、定植後に新芽の伸びが良くない生育異常株がみられ、展開した葉の葉柄が赤みを帯び、葉縁が黄化や褐変して、外葉が枯死する株もみられます。クラウン部が常に湿っている状況が多い高設栽培などで、被害事例が多く発生しています。

<チバクロバネキノコバエ生態の特徴>

ハエ目クロバネキノコバエ科の害虫で、成虫の体長は約 1.8~2.3 mm、頭が黒く、胸と腹は暗褐色、翅は褐色を帯びた透明です。イチゴに寄生する幼虫は、老齢になると体長が約 4 mm、頭部は光沢のある黒色、体は白色を帯びた透明です。

成虫が未熟な有機物に誘引されて、そこに産卵します。ふ化した幼虫は、主に未熟な有機物を餌として生育しますが、大量に発生した場合、幼虫の一部が植物の地下部や地際部などを加害します。卵から成虫になるまでの世代は、25℃の気温条件で 15 日程度です。

<防除のポイント>

- 1 未熟な堆肥を施用すると、成虫を誘引し、産卵を促しますので、完熟堆肥を用いましょう。また、有機物を含む基肥などの処理は、土壌と十分混和されるよう丁寧に耕起しましょう。
- 2 圃場の周辺などに雑草の枯葉や古株、作物の残渣等が大量に放置されている場合や、堆肥舎などがある場合は、そこが発生源になりやすいので注意しましょう。
- 3 成虫がハウスへ侵入するのを防ぐため、ハウス開口部には 1 mm 目合い以下の防虫ネットを展張しましょう。
- 4 薬剤防除を行う場合は、交配用ミツバチへの影響に注意が必要です。

表 1 イチゴのチビクロバネキノコバエに登録のある薬剤（平成 26 年 10 月 16 日現在）

薬 剤 名	希釈倍数	使用時期 / 使用回数
ベストガード水溶剤	2,000 倍	収穫前日まで / 3 回以内

農薬を使用する際は、ラベルに記載の登録内容、使用法、注意事項などを確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040